俳諧一串抄　乾

へ5
1314
1

門 へ 利 5
號 1.314
巻 1

[seal]

爰に筆あつまる友六人まじめの好たる輩さがなく
むかしを好む世の中乃すたれまやりし世をよしみづめ
ゆるくてたゞをやびなる詞をむねとし古への大ゞさ
びん乃すがためもいとみやびやかにこの川に清書しつらねを
守る筆をさみなとて世のならひを捨る言葉の風流をもつてハ
俳諧乃句のまなぶべき序にて其わけをもらく今これ
出せる句どもハ一とせ道乃人まじまじおもふまゝに
おもひゐるといへる おもひ出ての言葉のりを集めたり

俳諧にハ定まれるひとつの格なし彼ちからずして
このま概ありてぐちあんつまく一定格をバえて独り
ゐあるさまバいひおのれる古ら能るどもきべて
きいうことを文字乃すく語のよろ文の移りみ文法
くる人ハ文字といへど心ちのまたびしきつよいて
私まで我も語しとも却しとも字独しても然
しとど古くにもそれえてして体格正しき思
ならびやハさまバまや今此方よ彼等の句となる

ひのまゆをひまで定まれる格の中よりさまざまのけ
ぢゑにいる正域志あしきこと学びの為よりさは
るのまゑをたゞしくさへさゝもて独りぬめおのれ
いとけなきもの語学びのゝ心の内のはてにさりまた然
通ふをばらむびきて語もゝ此ふとをひきうんてはじめ
て俳諧の句作りを定りのよまひまゝて我ものとなる
なりとなるきまへまゐぬ俳やまづいの句をはるに
ともなのことをはぢ乃もとをまとしてるふからむなま

みよしのゝ浮ぶる斗かり寝めまでかく体格よりまひとつ
乃峯まてもえしのゝをつゝあふきとしへたる字や
ある実より一串抄と名つけられたるまゝ乙ぐんなり
何を標して見ゆるみじかき言葉に於て筆
て深きとゝ何をまめし後の志を殊十有のま
まさるの秋上野庵にて乃不可やまよ受
当舎園のあるじ
志るし

俳諧一串抄目録

○名ハ體用此えある事　初丁
○俳諧の俳句ハ体格ある事　二丁左
○俳句の格ハ數様あつて定べき事　三丁左
○古今集の俳諧歌ハ翁の俳句の説ハ
○なしとぐる事　六丁右
○首尾利新古集づ滑稽の事　十丁右
○俳句を作る人品の事　十四丁右
○翁の俳句俳諧の字義より出る事　十五丁左

○正當並名の事　十七丁左
○萬物に序ある事　廿六丁右
○俳諧の中興する事　三十六丁左
○翁が成人の事　三十八丁左
○發句にも必季詞を用べき事　四十丁左
○切字の事　四十一丁左
○二段切三段切の事　四十九丁右
○そなれといふ事　五十四丁右
○連句俳句差別の事　五十八丁左

○隠士三句を解く事　六十丁右
○發句の魂といふ事　六十二丁右
○学ハ法によるべき事　六十六丁右
○頌詠の部　六十八丁右
○境界の部　八十六丁右
○獨書の部　九十丁左
○名所の部　百六丁左
○俳格從隠氏事　百廿二丁左
○響を用ゆる句の事　百廿六丁右

俳諧一串抄（いつくわん）

六平齋亦夢著

○名ハ體用の元たる事

それわかし物の名ハ其実を表する物にして。実ある
ときハ必体あり。故に名実一致とも名体不二ともいふ。就
しく其体ハ用ゆるが為なり。由て名と体と用と三のもの
のハ相ひく離るゝ事なし。たとへバ筆ハ毛と管（ぢく）と合し
たるハ体なり。名を文手（ふで）なり。物をかくハその用たるがごとし。
其用を変ぜんバいつまでも物をかくが筆の道なり。道を誠

なり。誠なれど天地(あめつち)と共に久し。されど此二ツに於て名ハ元なり。故に孔夫子も名必正しうせんと乃給へり。総てよろづの物。名ありて体あるものあり。名のみにして体なきものあり。琴棋書画の妙きハ。手にとり目に見ゆる体あり。詩歌連俳の妙きハ。名ありて体なし。これらの類ハ其名の即(じき)に体にして其用をなせり。されど琴棋書画の妙きハ。其用志らして体にたまりてある故に。其用を先に専なり。詩歌連俳の妙きハ。手に取るべき体なく。用ハ名に先立てり。人の心より発するものなれバ。其用

をとるに定め難く。やゝもすれバ名を離れて邪(よこしま)になりやすく。ものゝ少しかしこけれバ。学者ぶりの人説をなせり。さて詩歌連俳の用。其名にたがはざるをいはんに。詩ハ異国の器なれバ。しばらくおく。すべて歌の名を手易くいへバ。歌とハ訴(うつた)ふるの義なり。人々喜怒哀楽何ごとにつけても心の鬱(うつ)懐(くわい)を訴へ出しなバ。心をはらさしむ。これ歌の用なり。飛鳥井の中将の「わすれくさや我心憂」叙の正徹が「中々になき魂なるべし」とよめる類なり。これらしてこゝろの鬱懐をうかへ出せるなり。連歌も其内一体

すぐ。清しぬるが名なり。安永の貞佐(さださ)が夜川の附句。
乾胡公の麹子川の附句の類なり。こ川ごふすの義
汎ふりのふ移くこと一なり。読しく其用を数ふるに

○俳諧俳句に体格ある事

詩歌連俳おのおの格あり。体につきたる格なき時ハ見
を体格(たいかく)といふ。格とハ物のことはりの事なり。筆れお
ろがしぬ為に重く慶を。筆格(ひつかく)と名附るにても知
盈し。歌の格ハ物に一筋に云ひ喩(さと)も。連歌の数句も
一筋に云ひ下す事。歌にかなへど。むかしより俳諧の格を。
此物を以て彼物を云ひ喩る事。たとへば人に物の
裏を見せて。其表をさとらしむる仕方なり。さて
連歌の格とハ大にかはれども。此体格を定めおかんとせバ。

○俳句の格ハ題詠にて定むべき事

詩歌連俳の学者。初のほど梅とも桜とも。定題をま
うけて。詠むものよと試むべきなり。是を題詠といふ。
斯のごとく数多く題詠して習熟し並ぶれバ。喜怒
哀楽の事あるに臨んで。詠じ詠ずるとも自己(じこ)流の
体格もなく世のさまに人その気に合はざる事なく。

かの道もまた古典古實ゆゑひハ物語ふミをよむ
に於てこそ古人の意に叶ざる事なし。されバこそ
辞の類多くさがうち歌ひて其ことわりの第一ゆゑ
發語の道といふなれ。連歌ハ中世に興て。猶ハ歌
になりしく。其發句ハ五七五なりしく。（此五七五ハ俳諧の無るべきことなし）
その上とても優にやさし。されど夏物紙云ひならん
とまるに勝ぐ。僅に十七文字なれど何となく和て
捷く覚ゆ。これ古詞のまゝを用ひて字音を用ひざるが
故なり。實に皇國のさま字音を用ふるもや

古くハ皆平なるこれに列ぬ。古詞雅言ハ都ゆく今
叉の稲に不ふひ。且凡庸の者ハ清なり遠くもとこの
しき業にわらひ。竟に字音を用ゆる俳諧ハ與れ
るなりらん。其元祖ハ松永貞徳貞室なり。ちかくまり
芭蕉桃青といふ人ありて。こそ道に出し。竟に俳
諧中興の名を得たり。これを翁と称し。近ごろ世ハ
神字をさくへ家るとぞ。わかふにそ中興するも。句
を作るの者拙きハゆくらひ必ずたゆうふの俳格に出し
ふるが故なるらん。拙そに窮波しろくのちこそ流連紙

くむの門人。世に十哲と称せる者。おの〳〵名誉あ
りけるが。いつしか人々にわかれて其好むかたにおもむく。
おの〳〵が好る変の風調のみを先とし。むかしく
に門をたてゝ。互に正風伝来と名乗る。その十哲乃
内なる。彦根の許六が著せる俳諧風俗文選并
回ふいせそく。

直指伝守武宗鑑より以来。奥義をとるものゝ徒
俳諧と名づく。実なる事は翁を志して先
師をそしめて柔極要之の縄をわすれぬき。正風

幽玄の実をとけり。道のべの木槿は馬にくはれ
けるより。あら野猿蓑にいたりて。正風躰を
たしかにあらはせり。當時ひそかに其門人
の俳諧は。全く先師の流にあらず。晋子は俗
を好みて。おの〳〵が一風をたてたり。杉風日の
風躰は其ひとつの名をあらはす。酒をも雑と
も名付けるもんに俗のたぐひあるかん。化乃
それぞれの事は。されば其角支考は下手なと
は申し。先師の口癖はよく真似けるが。それ故

の流よハあしかりき。

斯いふ許六の作句迄かりふ。正より不正より。これもまた

季変を志しけん。今又世十方の俳士。同郷隣里又同

ふこそ。互ふ争ひをしるも亦彩の如きなれ。其是

甚土甚師の風調に翻て。かの是れこそ正風なりと

いひ。他の風をそしりけるを翻来つるものまなぶ

すくなからぬをなれど。かのし他の公(かおやけ)に 詩歌連 等 通せ

ざるをいふにハせん。己是他なし。翁のそれいふに於て。

志るハ一定(てい)矩(ぎ)ある事に合はざるれ故なり

よれハまだ此道に経たらずといへども。志たがしくかふ

変を述む。さればそれいふおほく。かやうの事を紀(き)を

ハぶけり甚名を正さるゝに志くハなし。俳諧の名。

○古今集の俳諧歌ハ翁の俳句の祖よハ

あらざる事

の行ことしまでハ史記の滑稽(こっけい)傳(でん)に出たり。滑稽れい まれハ古人

牛に汗をしらねど云ひ並されど見のて知にかしたがふてもあり

且己が言のし幼なる事を見ざる者の為なれバかく云を示(しめ)せし

滑稽ハ俳諧也と注し。皇国(くわうこく)にてハ古今和歌集

に始めてかいふの名ありといふ。統まふその歌の世ぐく。

史記に於て俳諧とよめるの趣をたづねけり。近世或人はある歌の姿を執りて。俳句を作るの蹤接とする者もありけり。蕉翁は史記の滑稽に准じて作りし俳句とたがひあれど。今まづ史記と古今集の名づるけぢめをこゝにそのも喩にいふ。

史記滑稽傳　索隱曰滑謂亂也 稽ハ同也。云云

威王八年。楚大發兵加齊。齊王使淳于髠之趙請救兵。齎金百斤。車馬十駟。淳于髠仰天大笑。冠纓索絶。王曰先生少之乎。髠曰何敢。王曰笑豈有説乎。髠曰今者臣從東方來。見道傍有禳田者。操一豚蹄酒一盂而祝曰。甌窶滿篝。汙邪滿車。五穀蕃熟穰穰滿家。臣見其所持者狹。而所欲者奢。故笑之。於是齊威王乃益齎。黄金千鎰。白璧十双。車馬十駟。髠辭而行。至趙。趙與之精兵十萬。華車千乘。楚聞之。夜引兵而去

いふところの滑稽とは。淳于髠などの行ふ変文のさまを名づけていふなり。上来史記の文意は。齊乃

威王の时。楚の王より大軍を發して齊の王城
伐んとせる故。齊王隣國なる趙の王へ。救ひの
淳于髡を使へして。救ひの軍勢を借んとせ。
其贈る音物として。金百斤と車馬
四十乗を為持く。淳于髡に仰せ給ひけれバ。髡
これを見て何ともいはず。只空をむかひて大に笑ひ
居たり。齊王その子細を問給ふに。その答ハ申さ
ばしく突然としていふ。我今東の方より来りし
しに道のかたはらに農人ありて田の祭を祈る

其祈る処の供物ハ。たゞわづかに牛のひづめ一ツ酒一
徳利なりし。さて祈り求る処の穀物ハ毎年ま
十倍あり。それがをかしくて今も笑ひつといふ。
齊王これをきゝわけ。わが求むる処の救ひの勢ハ大さ
しくは遣ハした処の音物のすくなきをさとり。音
物を十倍まして趙へ遣しけれバ。趙の王すぐに
軍勢を借り来れり。楚のいくさ人これをきゝて
その夜のうちに引去りたるとぞ。されバ滑稽人の
祈りハ此恒梅るく。按ずるにこれなり俳諧とし。

苗物のよくなる事を文字にもいへバ。こゝのつ
かぬ農人の供物の少きを云ひ。こゝに齋王なりて
其実を合点さする仕方なり。然るを清輔朝臣。
古今集なれバ歌の陪に。

清輔朝臣奥儀抄

俳諧の字ハわざごとゝよむなり。これによりて
ことに人偏に戯云とおもへども。必しも然らざれ。
案ずるに滑稽の業ハ。道にあらずして道をも
道となすなり。又俳諧ハ非王道しかも道を

述妙義ある歌なり。故にこれを准滑稽。毎
口利口あるもの〻如言語。火をも水にいひなし
なり。戯ハ狂言のやうに妙義をいひつれバ。此中
心にこそ明にかくされたるべし

又契沖あざりも古今集餘材抄に
誹ハ俳の字をかくしかるなる草書の誤れた。
誹となれるなる滝し。俳ハ玉篇に云ク皮皆
切雑戯なり。諧笑類俳優。日本紀に俳優をわざ
ざをとよめり。諧ハ玉篇に云ク胡皆切和也。合也。

調也。倡也。戯ハ以テ周ク。徒(と)聊(りやう)ノ切和合也。天下(てんか)ノ
切遷也。淳于髠優旃(ゆうせん)と云人等が戯言(ざれごと)ふことゝ
よせて。時のたはけとなれる類なるべし。
なくこれ滑稽の大体なり。滑稽ハ王道にあ
らざれども。妙義を述て。時に用なり。
上来二大人のことぞ。悪しといへども。おほかたさ
るゝものゝざる訳なり。本来世をうつ折りふし滑稽俳諧
の義ハ。俳と笑談をなせりのハ。諧と大道をとさ
和合(わがひ)るが肝要也。淳于髠優旃等れ人を。皇国人は

○曽呂利(そろり)新左衛門が滑稽の事
くゝ爰いふべ。太閤秀吉公の臣曽呂利新左衛門
是なり。ゆるとき太閤微行(びかう)せんと仰出されしより。微行
とハ近習の侍ともつれを具して。外に出て遊び給
ふんとの事なり。されど数万人を率(ひき)ひ給ふべこそ。
太閤も太閤なれ。微行ハ危き事なれど。必諫め奉
るべきに。かそれたる事や。諸臣たゞ畏て居る
に。新左衛門御前にありて。例の洒落しと云ひ出ん。
されど比鞍ある山にゆきたる事。蓋て皮及びし

見越入道にあへり。入道これを一口に呑んとせし。
り道ハすこしも迷ふ所なく此ことに悟すべきハ句海へ。
ゐりし其許に変化自在の術ありとこそ聞くハ
足が一朝のなぐさみに其大姿を梅干に変じ
てみんを望む。それをみるくのちからより此身を悟さ
せんといひけ道だ。かの入道さもあらば梅干と変じ。
足が前にころび来る。是れこれを手のひらに
のせんとし。其だし畢む其儘にしる。握つて終り
あみ扇子ひりくる帰りさりと話れだ。御茶こゝに

大笑ひとなり。其のち徹翁の語ハ止ところ
とぞ。これハたはむる道ニ嘆言合大道のなり。俳
諧ハ世俗の滑稽なるべきなり。然るに是又こそ
なきたはぶれハ狂を裏義抄に非王道して是とも
述妙義ある狂なりし。の続つるハ引にそれ。なほ
こゝろをみるべし。

梅の花見にこそ来つれ鶯の
ひとくひとくといとひしもをる

山吹の花色衣ぬしやたれ

ぬくどもくちなしはて
いくばくの田を作ればか郭公
しでの田長を朝な〳〵よぶ
いつしかとまたぐ心をはぎにあげて
天の川原を今日やわたらん
むつごともまだつきなくに明ぬめり
いづらハ秋の長してふ夜ハ
古今集に五十八首の俳諧歌とてかゝる姿なれ。されど
今ハいとめづらしく。俳一字の義ハあれども。其道〳〵

引合せる諧の義にて史にありて。史記にいふ所の妙
義ハ。俳諧二字の義の格ふくるゝへの事なり。諧
ハ物二ツ和合せる義なりく。俳の笑ひ言を以て。諧
と大道に引合たるを俳諧と名付る事明なり。
其説の説ハ只物を一筋にいひやしるはてなく。
二ツを引合せ妙義となせるものなし。それハあづかく
おかし。俳諧とハ彼の事を云ひ喩さんが為なれバ
此れを云ひ出ん様なれども。さし縫くいひて此れを以て
彼を喩ぞの義なり。蕉翁が諧のかなめらし此義

あり。又奥義抄に火をもえにいひそへとあるぞ。
称する事なれバあしからねど。的当の境にかゝらバ。
そのかく上来の歌にも変もなし。的しいなく
俳諧ハ火のあつきを称し。水ハ冷なるを喩也乃
義といふ趣きなり。いづれにも古今集にいはゆる歌
の姿ハ。俳諧の発句を能する説援にハ破がる紀なの
ありだかりふに往古世話紙。あれかし歌と記されし
ハ。只大せうにおもひけ縁くるなしらん。又ハ後の世の人
をしらく。正歌と雑歌のけぢめを知らしめん為

なるゆゑ。さう能き題なれども事そのうみ判に
拙び。朋友と二人木屋町に出しが。此町に遊く
よみ書生など集りて。かのひし抱学びするうち。
事が隣なる会りに住む人ある秋催する楽をうたふ。
所から隣に志げらなる秋なれバ。いとあはれなり
きこえし。其陸とめてかの人など宅へ立ち迎し
由意。よべの事うれしさのべさて今一曲此所まで
物し給へと請ひければ。翁もたえじめける。初手
に桜人次ハむしろ田なるに。ま世なとの老ども

及ぶ比。只一事俗言の交りたる由意。おぼえぜ
朋友と点見合られど。たちまち疏ひやかく。
去ハ此経学びうけたるがくハいまだ熟せざるごとく。
恥らしく附し帰られし。されど中事比め
でゝく覚えたる事へ。彼一事交りし夜中。
事ハいよく学ぶかりき。此集に此頃迄あらず
ゑ。歌の正雑を分ちて為ぬるものしく。妙義秘
述んとの分まハわかしぶ所毎しぬ。さて史記乃文
よりこてまでハ。古今集なる俳諧歌も。俳の義

のゝおかしみ。俳諧の發句を作るの說にハ厭ぐさ
きせいふのゝ。さて人に去ればハ發句なるに。俳も
新義之諧ハ合に和之とのゝ喩しくハ。初心にも
事足らずと思ひしるや。先今案俳諧も平和俗
談或ハ平話俗談を乳を拘なりなと義へしとぞ。

○俳句を作る人の事

俳道とも斯のゝ示ほどもや。なり一筋に俳一字
の句となる過し。滑稽人の於ひなき俳諧字
義にかけらし。翁が句のやく導んとあらバたれ

これハ平話俗談於此ニ出る義なりと示し給へき
なり。此とハ何よくも詠物なり。平話俗談とハ鄙
語なり。此とハすなハち當呂利がいたんとよまれ
徽形の謎めなり。平話俗談とハ見ん鐵入るなり。
於 豊國にあれうこの字義をゆつうひ来る例ぞ
いわず。源氏末摘の巻に。姫君の御容貌を。源氏
の君がくり給ふ御ことばに。
その鼻ハ普賢菩薩の御のり物
季吟が注に。此あたりぞ俳諧なりとあり。又伊勢

物語八つ橋の段に。
はる〳〵きぬる旅をしぞおもふとよめり
ければ。みな人ゝ乾ひのうへに涙おとしてほと
びにけり。
とあるを注に。此ところぞ俳諧なりとあり。ほとびるとハ
俗にいふむじやけるといふ事なり。飯の上へむだや
かるほど涙が落るといふ事なり。二条后のかなし
みの涙に被給しなり。すべて普賢菩薩の御乗
物ハ象なり。就れぞ象鼻といふ事あり。此ごとく

物事を世にいまだしらぬ。外の物にて喩し
たる説。注者も俳諧とハいへど。季吟ハ北村氏
正家ゆへ翁の師なり。さて鄙語とハ俳の上のこと
のまゝにはあらじ。凡そ人家常に用る。戸ノ障子
食器衣服等の雑具。上品下品を混じていふなり。

○翁の俳句俳諧の字義より出る事

今翁ガ発句を以て。洪をのべて彼に引合せる
具合説示さんに。

四ツ五器の揃ハぬ花見心哉

四ツ五器ハ平常の雑物にて彼なり花見人ハ洪なり
句意ハ洪の花見る人のむまもふくあるを彼の四ツ五器の
大小そろはざるにて喩せりまた古人の詩歌式ハ彼をも
を彼にもちて喩せるハ

はせを野分して盥に雨を聞夜かな

老杜甫が詩に愁聞二今夜雨一只是滴二芭蕉一とある説
傍にかけちて草庵の佗しきを喩へる此句より以て深
川の庵を芭蕉庵と呼しと八桑老がかゝれしもあるなん
句意ハ杜氏ハ芭蕉葉の声をきく家ハ野分の風に芽

屋を吹荒され漏湿の幽に雨をきよく嘆じける
なるべし彼を以て句を作るは甚近けり君家の句ま

早稲の香や分入右ハ有磯海

是春秋経に豊年を有年と記せるを彼とし季(トシ)乃字
即稲なれバ早稲りて有の字を味起せるも蓋紀は
似られと境界能八十七丁に未ダ尽しみをとり屋さ段を作れるを
照らし見て知るべし是まで彼此のゆづりひに二格ありて
意義ハ一なる事今柳の句の限り九句をあげて示

八九間空て雨ふる　柳かな

柳ハ温雨ハ実なり。句意ハ柳のぶら〳〵さがり
たる容態(ようだい)ハ。空のしぐれ雨れ降掛ると喩せらる
なり。雨の降る絹に見ゆる柳ゆゑと作るべきを。
雨降と打切りておくがきれうひなり。此打切りて
おくを突放(つきはなし)ともいふ。哉の数字ハ柳の字れよく
引よせて見べき格なり。雨のふる絹に見ゆる
十分柳ハ此のあらわるなり。実に動かさる花の心頭
べき事なり。歌詩にかきつびのあらくの文章。
或ハ画盃家能も。いまざる実境を見て知らずる

人の為に作るものなり。発句もいまだ柳を知らぬ人が。柳はいかなる物ぞと問る時。答て柳と云ものは。たとへば八九間も空に首の随ひに垂る物ぞと喩したる義と知べし。柳も覇王樹(さぼてん)も不二の山も象潟(きさかた)も目撃すれば。直に実境を見知る人に対しては。画も発句も噺も無益なり。されば文辞は実境を知らぬ人に対して初て働くものと知べし。

○正當無名の事

古語に正當無文字といふ事あり。正當とはさしむかひの事なり。たとへば客と主人と相向ひてあるが如し。正に当て向ひて物語する時は。終日かたるとも口と耳とにして請取渡しは済む。夜筆一本用ずして埒があくといふものなり。今柳といひ象潟に正當し正しく見請る人は。自身は実境にて請取渡しは済ゆゑ。句を用ひ作るに及ばず。これを正當に文字なし正當に不名などいふ。扨しは文辞乃用はいまだ実境を知らぬ人のためなり。或は後の世に

生るゝ人へ。今の事をいひ送る為なる事必
せり是をもつてみるに百里百年の末へ林泉深
に隠しぞ。おのゝ得失の道理を。文辞に載て
やる類夜。文者道之器ともいふとぞ。其裁なるに
あらはれて文辞に体格あり。然なくハ千年に至波
が遠へも百里百年の末ハ叔おき。諸の人々も今き
く人々も更に無他ぬ事となるなれども。よく
体格を学ひきたりて。句作るべきなり。体
格ぞに明なれバ千里の外万年の後の人にも。因

庸しく譬喩をも用ゆべく。神代のむかし
の歌。或ハ孔子釈迦の経論も。今日目前に明なる
ハ。格の正しきが故なり。

きれ物干しさらる柳のしなひ哉
傘干都しほしけみたる柳かな
うくひすを襷(たすき)に賊子の嫋(とを)柳
なちこちや両しさらし哉 柳髪
衆の狂ひゆり放くる 柳かの那

初二句ハ柳の柔なる意を喩しくぶるべく。

雑物傘等の俗物ニしあんだいハ異なく一季せぬ
まゝく人情ニよし。離く合点の出来るなり。
次なる柳ニ眠の見立。これ美人ニ眠りの貴
あるニ句をなせ。みやびなる等は魂ニかゝりく。
たをやさを喩しくり。四句めハ髪一編の見立
なり。末れ句ハ昼眠るをこ行なせく。柳の
枝の揺力なきを喩しても上来六句ハ柳か主
の格。今一格ハ事物が主なく。渉る三句覺く。
支物とハ季節なき物をいふ。事とハ人の上の須喜怒哀楽等。物とハ不二の

山も和歌の浦も中花も絵も刀も雲の上人も合もみな物なり
季節なき物が主とな
れば。季節の柳ハ客となりく。彼此相反をなれ
ハ所ねく千万句あるとも。此二格の外ニ出る事
なし。此三句ハ是なきもの支ニして端書の主と
知るべし。

猿雖ニ對ス

それくの所ニ柳ニ任スべし

杜国を送る

道の後に柳縮る旅出その家

楊柳歎意の賛

青柳の我うしむなぶ佛うな

初句ハ和の辞あれど。後鎖ハ門人と知るへし
端書ふ對ましゆるむ流ハ。世の変りたらくて
蜀墨くしくまづ欠け。香菜うふしく永くなん
ふあど移りつゝ。柳を借りていふしかんとすべし。
次の句ハ万葉ふの歌ふ。柳の糸れやたしろあると云ふ
思れたるの銭ふせんたどゆ述ど。借りて別述の辞
と志るる可し。佛の句ハ予道ふ對したる主

素丸の句と同躰裁なれど。其和ふ無るべし。
此之句も彼此和合して俳諧字義の形なり述
ど予万句も此格もて一串ふ流しぬくべき事なり
しく知べし。斯く格をさづけて巻にある句也。
何れど云ひ辞さいう韻ふ云ひ論ありしてる縁ら
りしき体裁も。句意ふたやうふ云てくおのづのう
明なるん。その云ひ辞き云ひまりしてうあるる。
若殊しきなおう述ど。人その姿体裁を使ひ
世ふ弘まるもあらん。是を流行といふなり。されバ

いかにも面白く珍しく思ゆるとも。若格本是なるハ俳諧とハ名づけがたし。たとへバ世の風俗に羽織のたけの長くなり短くなるハ。所流行へ。流行有ゆへ世の中ハ活きれ。流行なくバ世も静まりかへられなん。されバこそ流行なれバとて。羽織を常にも用ひるやうなれバ羽織の名義を失ふにおなじく。俳諧も流行の時代に移りて。名義の道理を失ふ者に成ざるなり。兎角去るハ只の体格也。八九間空で雨ふると云ひ捨て騒ぐ人ならして。

おのづから柳の姿を合点さする格に作るべし。旁なり。仮令ばなりふりにかゝはらば草を折りて蛇紋驚かせる手段なり。庭上に蛇のぬけがらを撰び。あれを添へたるに。捧まくかさりたる草を斬。蛇をしりておのづから逃げうしむべし。若さらに蛇を打抑うるも蛇ハ破れて逃げ去る事絶えだ。捧ぐ採れてもされなん。さもれハ物も知らずなりに逃げての もが上策なり。かの太閤微行の作ゆりしと記。若加藤清正切桐ゆきに申しき人の言に権にかかりて。たゞ

ちかに諌言申しなバ。君の御心に移りて忠言とハ
きこえしめさるも。さすがの人情なれバ。言葉の種
縮ハ句端境の言語法も以てうがちんを省略が
俳諧まつハもちとありに御言を盡し。實なく
功といふべし。蕉翁の發句も此體耳妙を得て數
ありぬるなり。

蓋見れた首筋赤紀かゝる
きりぬきれ猫も知るべし夜の秋
初雪や水仙の葉のたわむまで

初句ハ表に蓋し首と紙迄て。穂く人をしらく
あらしなりに反し尻と紙合点さするなり。
中の句ハ法貴細工の動きやうきをあかして。人
をしてゆもしありに彼国はいやうにみえぬ隠杖
凡を知らせたり。凡紙表に云ぬ所の大ぎハなり。
後の句ハ革れなのミけくかよわき物をたゞ
寄せく。初雪れけしき斗ぬりぬるを喩し
たり。就中法貴の猫探すましく妙なたのし
ミかるゆやしき単語俳諧の具紙むかと用る

に深きんあり。いふとなれバ凡文辞の底にも
事を尽くといひ遠くまで肝要なり。これを請
返波しと以ふ。一波てなる事ハ何を以てと
いひとる趣なれど。古書にもいへるごとく。書ハ言ヲ
尽さず言ハ意ヲ尽さずとありて。いかに意味深長の事
ありても口のいひ解く事能はず。辞の文章
よすべきなれ墻に隔てハ。腫物に隔靴の猫等乃
曲りの段用ひて。人をして堀に立て梅を合点
させるに等しくハなし。これ蕉翁が古言にて。人

情に叶ふさ故事。ゆゑハ底意を用ひバ。只
耳なき平物を用ひ。平物にて廣ふしらくかり
可笑くかり。故に四ツ文字とも。盥とも風
とも喧嘩とも楓の利しゆさまとも。又物乃貴
賤をも示すにハ。金とも銀とも錢とても
拳とも。大坂とも浪花とも難波ともいふ。大
坂といへば聴く人の心。商人におのひより浪花と
いへバ詩人ぞと察し。なにはといへバ歌よみ
なりんと知るべく。おやく将がわくなり。発物とも

とりの上なくいへど。歌なくハ酒のむしろ歌
のむしろなど。むしろといふに。俳諧なく
ハ興ともなりとも滴くりともかさをなり
とも。呉座とも拭板とも毛氈とも書とねとも琉
球とも備後とも只ハ古備しとも。其頃産取りこの
けて方位までもかわりたる季節も違ねがくれ
如くゆかしくなる俳諧もて。其場其人柄ハいふに
及ばざいなる微妙も形容し。喩しく。
云の違いのざるハなし。歌なくても喩さぬにハゆかう

ねど僅に十七言の建立なれバ。俳諧の此をもりて
反覆して彼を喩を俳諧にハ志するのみなり。
かゝるさがなき建立ハ。かゝる質朴の代にハ決して
なきものなれバ。故を温る君子の譏りハさるるもの
なれど。上にもいひし如く時代の移りしも知
らで。数寄人ハ釈迦の末に達磨。孔子の後に荘
子ある如く。かわりもなきもさるものなるべし。
さて毛氈ハ上品。蒲ハ中品。滴くりハ下品とされて。
○万物に席ある事

人の心ハ分明なるハ直(じき)ま其の物ゝれ序之。俳諧
ニ於て詩文添物の物ゝニ序ハ何る事きニ。
動(やゝ)もすれバ難ふ人あり。物ゝニ序といふ定り
なくバ。文辞によせて情ハ達(とゞ)し難きなり。抑
某物の序ハなるや。人まちしくの心ありて歎き
なるハあらじ。元某物ニ合之持する情なり。
情ハ其なりて其物の絶ましく。いましくなるて
詩歌にも云ひ得べし。詩ニ某物の序とせは旅
なるなり。構なしバ素なやく咲て薫り高く。

色ハ紫きが序之。郭公ハ鳴づらしくもうれし
くこそ種まさきにも。雁の声ハかなしのにもはの
なくも。時鳥ハ待しくもをかしくこそ事く
もあるなんが如し。又ゆかりハ其物の名に於て
句を作るもあり。菫草ハ径にとり。松ハ待ニ
とり。胡蝶ハ躰にこそ浅きにも。白ハも。或ハ
其物の形にとり色にとり字義にとり功能
にもとる。其外にも歌にとるハ勿論。物語ぶりに
こり故事来歴にとり。人の耳に近き方に云ふ諺(ことわざ)ニ

あるまじく。みな序にかく事物を形容なして
の用なり。これらを世上の人の心におもはせし哉。
さて俳諧ハその物に事を全くいはずして。たゞ
傍をはなれずかけて。其響をうつして人の心を
さそふ。故にたいはんを和歌の塵屑といふ。此のん
なくもの糟に却て味ある所あるなり。
郭公なくや五月のあやめ草
世の中ハさらに宗祇のやどり哉
道のべの木槿ハ馬に食れけり

初句ハ古歌「郭公なくや五月のあやめ草
あやめもしらぬ恋もするかなの戯。ここの
句まくらハあやめもしらぬといふなん料の序にて。
かんなくぞのとられたのなり。今その取られ物
を捨ひかけたり。句れはゝいふのがさ月のあやく
ごん青柴のうちより待しいまに帰る夢。
まつしと前くれなりをかしさを。五文のあやめ
にあるをそくかゞやくといへる辞にて形容なり。
次ハ連歌の縁なり。此合せ時雨のやどりなる

るゆハ。何まれく世の人の心ふりうせかん。さて句ミ
ミ宗祇の世のやどりハ人皆のやどりと歎じたり。
絡りの句ハ槿も一日のさかなきるハ古今の人
れ詩歌ふ尽させおきぬ。道のべの木槿ハ馬ふ
くらハれけりと云ひ捨て聴く人ごとく扱も
その有りしと思ハせけり。さて詠物ふ含め
たる席の働きハ。

高野山ふて

父母のしきりに恋しきじの声

芭蕉が剃髪を

幼年ふ梳のそりし天窓かな

桃隣が新宅

寒からぬ露や牡丹の花の蜜

当麻寺にて

僧あさがほ幾死かへる法の松

粧女乃賛

枝ぶりの日ごとにかはる芙蓉かな

ふ二川の捨子を

猿をきく人捨子に秋の風いかに
　南都にて
菊の香やならには古き仏達
元起和尚より誦を借り返しは
我衰へて床入りする蹄への那
ありしの句。猿子に子を思ふの序あり。梅にたら
む序あり。牡丹に富貴の序あり。船の作り
まその枕序あり。芙蓉に艶なる序ありて。
猿の声に断腸の序あり。菊に子を思ふ序あり。

蹄に玄通の序あり。此序菊にて世の人の思ひ
寄りなり。故に霊山は墓所なる事を見
古に戒戒を知らしむる玄も。桃隣が新宅のゆ
かりなるも。南都のかくさび安堵を思ふ蝶
となるも。捨女の人に媚る情態も。南都の古
仏なるも。元起和尚の誦を借しれぬ歎き也。
みな其事を思ひ入ぬるは。それぞれの序は
依て猿が泣たる夜なりけり。今各位を替
て。南都の秋魚を菊とし。不二門の猿を蹄

とせバ。強く人いはでも作者の意に通せんや。されバ
此欲連が此席上に。古人の作例ある書をあ
また積おくも。此席を明にせんが為なり。さて
又名に似て作る句とハ。
あらうみや此蓋めされたく蕪菜に
なには津や田螺の蓋も冬籠
接木の小梨の浅ぎ穂や山屋敷
節季ハ火が来てくハ風雅も師走哉
初句ハ蕪菜此句にて。蓋の名義株くらす里。

株ハ異様屋かぶ。茶屋かぶ株の株まで。お迷
らのかぶを買入る〳〵に背(かやう)なく掛ぶとなり。
次を難波の名残がみもいをぬみうけたる冬
籠の句なり。二句めハ接(つぎ)梨の句まで。かし 掘
おふけるり。接木のとハ山屋敷のよびかし
まく。山屋敷の句にハあらじ。終りハ節季ハの
句なり。師走の名を始鉢の火にたとへたるを辞
の秀句に縛らりきりのあり。大作ハ茶坊乃
手に茶を波まく定まるなり。されバ二物入ぬいぞ

その句とさためがたし。俳諧のならひなれる
ことばしりきすべきなり。発句ニかゝはるためし
うつりもなくしきん。所ハよくうつるハ

瓜の皮むいた所や蓮台野

鶯の笠おとしたる椿かな

初句ハ名所の句なり。二句ハところがらなり。
色にいへるハ。

紫陽花や帷子どきの薄浅黄

あつくも三河紫麦のかきつばた

初句ハいかさね次ハ紫麦の句也。字義ニかよは
るるなり。

さかづきに泥なおとしそむら燕

鶉ハむかふにて焼そゝる山

初句ハさかむれ燕の字。酒宴の宴ニ音をし。
故事さかづきにて喝起しなり。鶉ハ音斎まて
物忌の事之洪日の禁欲に。無常の標をいはし
めたり。切能ニいへるハ

遠帰りあそれハ塚の菫かな

から鮭も空也の痩も寒の内

初句ハくすし呂丸を悼るなり。当帰の効能
を字義のかく。病ニ効ありて。其所より帰る
ものなるが。呂丸ハ帰らずして塚の下に住むゆ
ゑかくれとぞ。菫を住むの名に寄せけり。次ハ寒
中苦行の句にから鮭の乾れのなくを。かしく
空也上人を呼出し。人の苦行を勤めたる也。
乾鮭空也の痩りかけひ。あいらぬの活手段なり。
方言なく。

ごを嫌ひて手紙かゝる寒さかハ

物の名の鯖や古郷の風巾

三河の国ハ松だをごといふとぞ。次の句ハ江戸
よりも鯖といふハ伊勢なりハ烏賊といふとなり。
類をかくをのしことせり。本歌ニ寄るハ

麦刈て稲舟見せよ宮上川

古跡まぐゆのぞみに戻る寒さかハ

春雨や蜂の巣伝ふ屋根のもる

初ハ「いかにはいほど此月千」の本歌出てしまく。

見せよとあるハ。翁が真砂ハすゞき刈ど穂
なしざりし。次ハ「古口寒く夜々川あり」哉
忘れるなるべし。終のハ「清く〳〵と書れあり
めの淋しきハ君ふ〳〵清とふ新れ玉あ」の例な
らん。君ふふ清とふ玉あを蜂の巣ふ清さなせさ
るハ。蜂の巣まで人のしらぬ淋しき壌せゆう
け。清くぐ見ぬる古画の深情を思ハせるぞ。
本歌忘の句。集中ゆかしき也。其深浅ハ此之
句の間ふありと見る。物語書ゑ忘るるハ

猫の恋竈の前より通ひけり

唐きびや新だの荻れ忘ちぐひ

初句伊勢物語の文ふ統地とあり哉。今竈と
いひしハなひうの矩範なり。次ハ源氏物語
空蝉の巻れ文段なり。源氏の君新だの荻
のいね給へるを。空蝉の君ふ忘遠へなひしを
られけり。此句端書ふ田家とあり。翁田家ゑやど
里物ふかへ出く。その帰路に涼ハしき新だ
の声するを見んてれ吟なるべし。枝変ふとれるハ。

一露もこぼさぬ菊の氷かな

御命講や油のやうな酒五升

初句は綴おほしの花艶（ゑんれい）が長男に家をゆづる。此家集は数に效（い）とされけり。この長男は吝嗇（りんしよく）なりしをいへる句なり。次は日蓮上人阿佛尼へ報書に新麦一斗油のやうなる酒五升南無妙法蓮華経と回向しぬ」と申せしに擬れるなるべし。境に在るなるべし

大とく猿世の中よ加進酉の年

家に似たる門に割し去来

初句は酉の年を祝したるなり。次は子道年翁をと揚出けりし。家に似たる句もまたれ乃句にあらじ。凡ふる門は能く似たるに用ゐる境なるを今称ぶ遠ひたる体裁なり。句作のさへも家の行ひの公界（くがい）なしぶるを恥じ。子道年戒めたるなり。翁に出せる揚柳飲喜比賛も俳をも悟を浮けたるものに立置て、それを称ぶ遠ひたるなし。今の句と同体裁なりしそれと新

しきハ体裁ハやさしけれどものなり。秋のあはれく
云紫れ纈けにおもしろくふかし。新しき纈け
を織ことなし。しんハ闇夜にこがねを拾ひしごと
おもひと示せるとぞ。今翁が集を見るに頗る
しと覚ゆる体裁七八箇に及ぶ。これ実に愛たき
風なり。次に得つる発句ハ句れ寂（さび）なり。
うき我をさびしがらせよかんこどり
かんこどりハ閑居鳥なるべし。隠者の親を声とす。今
翁が発句と出るハ世の変をなり。楽とするハ

て幽深なり。すなはち今称へるさびしをりなり。
也。忠に俳言のあるハ。集中三四分ハ深情よりいり
観ずに入る。観ずなはち幽玄体なり。これ翁が
性質のひとしきゆゑ一家をなし甚だなり。総る
に識人の論に。桃青みづから正風といふ名をいひ
むし。幽玄体をおもしろしとして。却てなかなかの正
風体彩（まま）なせり。これらハ俳調なくをかし
こころを正風といふべきなり」といへり。此説すなはち
ちち古今集俳諧にわかつきる。俳一字の穿

鑿まさく。諧と引合せ大道にかなふへし滑稽人
のおもしろきあれなりしが。此をいふは字義にうとき
故遠なる事也。されども年久しく来るが
如し。論者も

荻むらを過てのけぞり行かしら哉　中納言定家卿

山風を擬はさしたる扇かな　大納言為世卿

小田原や扨ひのまゝに刈あはせ　大閤秀吉公

橋の玉にせられて来ぬ秋かな　宗長法師

宗継かなりやさながら縁起(うき)つゞき　近衛殿

これらの句なぞ正風とよべるなり。これ歌連歌
の俤ありてすなはち俳諧歌の姿なり。又何る論
者のいはく。桃青は世に妻を流し置く。されば仏
も用ゆることなり」と爪をはじき。旋頭(せどう)歌片
裂(さき)ける片歌といふものを俳にもはじめしと我。
泚人は皆これ鄙語を忌(い)み。或は小童男のかなしむ
の言葉をえらみ語をなさんといやしきこそ。式
二子は此の葉の道をと称するまで世に此君子
もまことさる事なるべけれど。翁もさるいきさつは

○翁俳諧の中興せる事

新る事なるに。新しく珍ならざるハ必杯のに所あるその友なり。

　吉野にて

きぬた打て我に聞せよ坊が妻

郭公今ハ俳諧士なき世への秋

后古風へ入るのみど風吟を

狂句風の身ハ竹齋に似たるかな

京都曲翠亭の俳諧ハ許恩

此道やゆく人なしに秋のくれ

　おもしろき

人声や此道かへる秋のくれ

此道へ出て涼しや松の月

　人の營意を制して

句寂れ淋しき味を忘るゝなき

初句ハ古く寂しく夜な川なりしの秋に帰し。

叱せよと振するハ。新たのしむ和のさびしさく。

郭公の句ハ當時其吟を吐く人なきをなげく。

時雨の哀を諭し。裏の心ハをかしみを専ら
とする人多きを歎しけるなり。風の句とて述
懐する狂句の墨字句眼なり。又狂句　扁鵲も耆婆も及ばぬ
我ありし志らぬ病哉ぞ　あはれなりける　にくみし如く。世の人家を志く
憤（いきどほ）りける句なり。其意ハ志しかさの風俗を
あるにつく新しき道あり。引人なしの句ハ。未落れ俤
しき道くなれるをゆく人なきりく諭し。裏
の心ハ浄土の易往無人と釈る譬ふりとつゞき。人
こゝろ懸ふなひうむなづのろ歎くやうとする幽玄体

好む人なきをと。寂莫たる叢林ゆけく歎し
ことし人なきしの句ハ花も紅葉も時ならぬ事く。
叢林の天に催されし人く。今ハ深情を筆と
せる道くりつるとなり。松の月の句。表ハ夜の引
語後吟し。裏の心ハ正風既に世にむなしからぬる
を。松の月のけく涼しといへるなり。表寂乃
句洪類なる俗集中に多し。ここに歓ね幽玄と
底づく座きなり。されハ論者の疑ふる如く幽
玄に深されど必俳の義ならん嫌はれど実は平

誹諧ハそれ狗傘鷹筑を加へて俳とし。人事
万端の世情を喩し。是を一家に俳諧と定めたる
なりけり。可笑しのことを専とせざれバ。されバ後
かざれども程なく旅をバいまだ異風の体ぞ多
とも成ぬべきを。ことに事実の法　台命を崇重し。俳
壇林の英名興る。されども彼化の家の維新をこ
つくし一家の道となさんや。實ニ旅をしぬりし奈
しきとく慮り後ニ一風を洗る。これ翁が世に遂て
○翁が成人(せいじん)の事

中興さるれバ。それなり。そもそも翁がひとしく在り
を棄なるより。其家に生れて武を守らバ。主人を
師としく被手にひでやうらバ。桑門に仮りて戒(かい)を受
とせバ。よろづを放下して市中に隠遁。幽閑を
好むハ薑好ニ似し。深理を探るハ西行を慕バ。花
しくおのれが長をとらバ。人の組をせしめバ。
そのかミを唇寒し秋の風
と吟じてひそかに暮るをかこる。風を慕ふ門生
好(すぶ)る俳格ニ従ふ事。七郎の集井今程ありて

是れ里。初て世術にも等しく交里。貧を身の
分としく寒夜を耻ぢ。法と兆て流蕩を井ん
ぞ。月花ハ人の拙く小強ひ。山水ハ佳境は探
もする義を労せび

古畑や花の旅山の拾ひ歩き

行年や笠きて草鞋はきながら

世を旅に志ろかく小田の行戻り

初二句格なれバ境界の句なるが故なり。然乃
句格ならく切字なし。されど世を旅やと作る

ときは今にと身は引付くるハ境界の句と見る乃
手示波なりされどとく俳諧にてのく手示を波
とせむるにハおのづ信得りく作る格なれハ信なくて
かゆるがきりハかゆるもかくもあるらんかくいふ
いとなみしねど歌連歌とハ既ニ性或変らく歌
りの世るもの友なり

紙子きも寂や重ねて捨てゝ見えし

あれらのたらひといふなり

田中の本義等まく

外はしや早稲行くの鴫の声

此ゆるかきりハかくれさきに出しても他る之句意まて早稲かりし後寺の行くまあわしさわしさを鴫りて諭せるなり此句一躰裁なり

○發句ハ必季節を用べき事

然に宗祇のやり上出せる句季節なく且秋に季節のさたなき句あれハまゝあらる季節をまもるを樗かくハり孤逸とも俳諧の發句ハ必季節あるべきなり此樗も加の名殘の格下りん付ざるべの

發なり。其發ハ季節現れし句ハ必なくらぬの義備し。これ當季の此を以て彼の事物を論をべきゝ格なる發なり。滑稽ハかりと論悲の名まて。論をそゝぎ出しくやすび利口かる書のけしらぬび抱いふ不文たる名すれバ変不縁にて句を吐くゑす。挙ハ意巻ぬるをのへて發句というなり。百韻なと續くる。巻の發端の發と於りふハ後世の沙汰なり。されバ滑稽てふ名も按他を義とすれた。所興をむる○と出せるなれうハ眼の行くり季

節の恋をとらへて物を喩るの傚ことなくてハ。いかでか俳士の名ふ居しんや。名所の句なと。季節なきもゆるさといふ説ハ。卑覧なるふれる乃元ふくしきが多く。佳句なりとも季節なきハ

○切字の事

二の町の句ともいふべきなり。さて又さしたる業麦の句も切字を指づき物なし。或人といふ發句ハ切字かるべき法ハいかなくいふふも切放ハ有無なり。總中切よりも放ぞ作者の手際とすべきものなりん。まづ切字を撰せんふ。發句ふ切字をかるべきなれど。法とてさむつかし。法よハ必法乃義あらん。末の世ふ人のおのが好りて定めたる。例格などのたぐひふハあらじ。天地自然かちたるなりふ立門抱絞法といふとぞ。聖人のいたある事第太位すかけち是なり。かりふふ法の姿たりや。たとへバ大匠の家を建るふかならずかねを紀づら紋なし。材木に凖をうがちこられを其地まですゑふ。そのみぞふ柱を濡へ試む。低きうらハ

必ずかふれざる。その去りくる所のなづく。あち
らなり平均ならん。これを法として家を建つ。
故に法の字はシに従ひ去に従ふとぞ。是を以てか
りふかりくの法は必ずかたらなりに立りのなりゆき
家の軒居低かれど。ゆく人あらかじめ門を知て色
とも。かたらしに效ふてこの法なり。今切字ハ法なり
なくて叶はぬ物とせば。家に切字なきも句成は
らぬに違ふとも。あれども。なくて叶はぬものとハ
定めがたし。總じて切字ゆるべき定法といはず。

去ばこそ問ん。ぞ切字此用ゆるは、いかに。切字
といふ使ゆるに就ては。必その用ゆる所有なり。
筆にいふ物の如く用ゆるが如く。若用なくば筆といふ
使ハなきものなり。されば切字も其用を明に
しての用ふべきなり。まして句の姿によりて。切
字有りとも無きとても定めがたき事ハ一覽の得手
就ての多分に任せといふも定めなきこと也。出来落し。去に
就てはかゝりになれども切出していふ言よりいふは、
きあり。故に親句疎句といふ名有りて。切字乃

深浅なし。親句とハ首より尾まで。五句の間
ことごとくつゞきたるをいふ。疎句ハ五句
の間に一縁の断るゝをいふ。親句ハ定家卿
の歌に

こぬ人をまつほの浦の夕なぎに
焼や藻塩乃。身もこがれつゝ

疎句ハ殷富門院の歌に

なかなかにいとふもあやうし。さりとては。
うきにたへざる命なかりき

｜ハ続き。○ハ断なり。断ハすなはち切なり。歌
ハ続きを重んじ。連歌の発句ハ切を重んず
とぞ。されバ和歌ハ切字の深浅なきハ。元来五
句ひとつゞきなるが故なり。連歌も和歌
数奇の阿仏尼の発句に

とふハたや秋のうきりに旅まくら
ゆふハまさ冬のたゝめの旅になり

かくのごとくきらしといひくぐをはさりとも
よむべきなれど。元来五七五之句のなれど句

たけみじかく平句と發句とのけぢめなし。されバ百韻も續くる發端の句なれバ、いかにもたけ高く優に作るべきなり。たけ高くせんとてハ一節の拍子をつけずにハなし。その拍子とハ七五三句の一句〳〵の境界の断。或ハ句毎の末を字まゝにかや哉下知なる字等。世にいふ十八切字ある句ハ留へあげて必たけ高く姿あるなり。

京なくて結ぶや。清水△柳陰　宗祇
袖涼し。△林を西風△夕月萩　肖柏

常や△おもてうつる夢のあやなる　宗祇
むハむと。△柳を髮を。附津風　宗砌
春さりぬむもや。△へだてられぬふるさと　兼載

初句京なくて結ぶや清水一語。柳陰一語なり。其次ハ袖涼し一語。林ハ西風一語。夕月萩一語なり。第三常や一語。おもてうつる夢のあやなる一語なり。第四花ハ級一語。柳ハ髮をむすぶつ風一語なり。結句ハ春さりぬむもや一語。兼載のふるさと字一語なり。おの〳〵△の勢語の断にて分明なり

切迄なりされど切といふ名目ハ此断よりぞおこれるなりしん俳諧に古人○点の所を切と定めさるゝまゝいまれありとて俳諧するくハ

郭公△正月ハ梅の花ざくの里

木曽の情△雪やはぬく春の草

荻の声△こや○秋風の口うつし

破風口に日影や○よわる△夕涼

松茸や○△しらぬ木の葉のへばりつき

菖蒲生り△軒の鰯の髑髏

此△点ミな疎の断まで分明ゆへ切也此切迄俳諧字義の体格より○あぢハひなり自然に出るゝもあれなり○俳しくよるるの引○せりの字ハ○いさめる十八切字れ限にかゝはらず○既に切となるべし○古人曰十七字れかなハ○ミな切字なりといひ座押て新館し○俳のうに連歌するくハ○点の所を切とせこれ又七八ニ疎の一疎中に有て切と名付る事義なきに似たれども○一篇のうちにて○此彼のうち義を喩えてのいはれなく○曲節一偏乃

用ゆることハ唱へあぐるに於て拍子よき詞のみ
なるが故なり。故に句の据様に寄りてハ。拍子よく
続きし所によくあり。俳諧の切迄ハ格の自然より
出されたれバ。義理に於て働の成べきにかゝはらず。其迄
切迄る所が句の眼目（まなこ）なるゆへの故なり。大凡格外な
るとも作意を用ひずして切ハ切ちかくなり
に備はるものと知べし。今六句の切ハ格より出る
趣を示さんに。たとへバ郭公の句も。此所正月と梅
の如く両意の心をわかつて。今の郭公乃英

夢を諭したり。本首の情ハ（本首の人情の句なり 表字の句にわたれバ）
言を生ぬく草の縁をとりて。本首人の情乃
意義を喩したり。萩の声の句ハ。不可聞
の秋風をうけて。萩の葉の露きを喩せり。只是
の三句ハ。字面の格よりて。初ハ文字の一語突
きかれしときに。二三の一語りて。其本情を喩し。
まだ尽波の字なくして。句意さる夜此所ぞ
句の情なることいふなり。夕顔棚の句ハ格に猶き
夜。連歌の姿に近く。句意もまたいひかよかしぞ。

松茸の句も志らぬ木葉へりつきの座五を帯し。
深山を見ぬ人も柏のかくれ蔵ありやなしやの句ハ新古
門並の松かの正月鏑のく吟起せり。去や近
るとすゞるを生死を志る世星移り物かはる
無常迅速を動かし世の無常の花を惜しむ。
かゝる佳節にわうしては。洪幽深をなし。人綴
殊ならしむるハ。これ翁が独なり。已上の切ハみな
格の自然にかなる所なり。又これといへども此格
に宜ゑざるハ△点の紙切なる事時のなるべかれ

だ。唱へあぐる拍子に於るも其句作なるべきなれ。
彼るにまれ○点の紙を切とするハ。大まかりし語の
句に於て他者の誘手に置ける拍子字家や二示の紙
なるを。後生の人。作の案にも無く切なりとかりに
ものいと僻事と定むべきことさてかく定め無く
まゝ打ちまかせくいなど。切ハ句と拍子一偏の用
なれば。格正しきがうく。深流のまとびあふよしなれだ。
○点の紙紙拍子に唱上んも害まハあらじ。代物の名不
今△○支点をわらはしかくされだ翁の二十八条

ちふハ書ても。切字ハ一句の骨柄なりとかるゝとぞ。大
まかし笑るとハ蕎麦の句すなハち是なり。去
れ御の句ハ杜若と置ん料ハ。首ハ之河とかき。
杜若より蕎の字を中の句へ引出しける。或の
ごとくにても之河と抱子の為ハ実放しかたし。是
言を中ハ収むるを。然てまハしといふ。兎ハもかく
にも抱子なしぞ叶ぐるしき。ましく指ハうせく
平句めきたるハいふも愚なり。後世ハかゝる句
をそのて興ある。切ハ自他ハ出しく。その自他ハ

出る物を人より名付て切と唱へけるハ乞
つのげるが故くだとへバ漢文の助字といふも元
よる実字あるをのちハ世ハ助字と名付るが
○二段切之段切の事
ごとし。まゝ二段切之段切も抱子こそさもあれ
只一切（されなるものと）
乙州が餞別
梅若菜まりこの宿のとろゝ汁
これとろゝ汁の句なり。時節丸貴貌かる梅若

菜をかく名物を諭しけるなり。ゆかりし路
一呼にいひ述べたる句なりとせず。一句無分別
となるべし。句意は今日の旦のもてなし何の味
か有らん。君がゆくさきには梅若菜に匂ひとな
らぶる。とろゝ汁ありて。揉桜来るる。鶯などに
く賑しかれど只一ツ切の句なり。「賑ふ八書整
山本にてぎんぜられし松魚」此句も二段切なりと
賞誉れ名物述ど。二物の称しきなれ共。初乃
字無しける松魚の句なれ。其に二語の一ツ

切なり。されども以下のごとく切は楔子一個の用なれば。
二ツ三ツわりとて詳文意をもつべきにもかくぱかり。
嫌ふべきいはれもなしと知べし。又二段されは

夕魚や秋をいふしの瓢り形

初秋や無きなかしの坂屋根寒

初魚のなに嘆り坂のよいまた

夕魚の句も二季入込なり。一説に二季入込の句を
必二段に切分ぬれ法とはいへど。是もいふなる有らくの
古語にも道者以テ一立ツといふなり。これ筆ても物

かく一道を詠くとも。秋を棄たる一道を詠て
是川といふ事なく。たゞ二季入こむ句なりと
も。詮なる秋の發句一成に極まる道理なれバ。
二段の切迄ハ用ゆる事なし。夕鳥の句の文字
のやハ。詠る「さゞ波や志賀。」「あなたのや鏡の山など
の如く。夕鳥を呼出したるのことなり。句意ハ夕
鳥といふ物ハ。夜ハ同じさまのものなれど。秋ハ殊く
いろくになるナア瓢に」とゝさくべきなり。梢子ハ
二ツなれど。句のこゝろとなる歎ハ一ツなり。初秋の

句二季なく切ハ一ツなれども。句意広く夕の法し。
流れバ二ツ切句の用ぞや。さるまでも法なり
といへども。これ流法の名に落ん。夕鳥の句見も
二季なく切ハ一ツなけれども。句意に害なし。
法を考ふ者實に知りて大体を知べきなりけると
端書よりいひ述しく切を持ものハ。

湖水眺望

辛崎の松ハ花より朧にて

此句諸の人口ばなり。或ハ剰てハ哉に通ふなどいへる

も是切字なきにあらずやと疑ふなり。哉と留
てよき句なりしバ。前句の子細ありてか哉と留
ざりしか。哉とせずして只松一方の景観となる
が故也。まさに端出ありて勝れる趣作へられる
句なれバやなり。其て留まる見てハ見しての
趣なき述たり。辛崎の松ハ花より朧にしてといふ
句なり。総てよし書ける句をなさぞ出を俳
諧にする格なり。句意ハ湖水郷の春色を近
うけてなにのぬ許なくうらゝかなり。さて辛

崎の松も花よりも朧にしてといひ捨し。此
而して其の流しもて昧人の心を端出の趣よく
引出したるなり。花ハ長等山に名ありとく
湖辺にあづかりしねど。此季の春にて入て名誉
の松一株に句をなせ。松の裾に朧をのせてめ
彼の春懸を思なせり。いつも絶妙の句にて
湖絶妙ことなる而その流しより出せるなり。総に
なし端出なく

比良之上　橋てうけ渡せ　宮れ譬

此句も端書へゆつりて渉とせしなり。これなるは
かいの範なり。まさしく手尓波尓合ある切字

景清も花見の座にハ七兵衛

粽ゆふ片手に挟む額髪

これ景清を武張たる名とし。七兵衛を通俗
の名に格好む。おハの手尓波に引分て。花乃艶
なるをさとしたり。粽の句ハ文尓平句と定まさ
端書ゆゑも働かずして平句なるハ。

佐木亭

蝶乃羽の幾たび越る塀の屋根

田荘の酒屋

桐乃木に鶉なくなる塀の内

枚主の芥まで

さ候くの句ありひ也次さくては
まづく指子なく格なく以ひ流しのこれ句ハ。
必端書にこゝろ収する例なるに。然初二句ハ定
義なきハ清を渡しハくて端を附のことし。
句ハ其趣となれるものなり。試に蝶の中れ句を

「猶よく越ぬらし桐の中の句を一鶴もとうし」
なと椿紙収やらんにハ端出にもたよりゆらんな。
此の句梅も野紫もこを端こを附するく。構まと
深らねどそ。椿あるまにく端書にも収まる位
となれて。初二句かそしくハ脇後ゆらんへのまさ
椿よく調ひこを端こを附にも付ひろるも。集となる
に旅てハそし出を用ふべきものあり。

蒼海の浪酒くさし今日の月

名月や南に深川汐ゝそし

初句の五文字深川と知るべきを。翁ハ深川
の住なる故正当無名の義与縁々こそ名残
有こそたるべし。これを立端こを附といふ。脱道
とも蒼海ならハ与にかなれ申されぬ。後の為
に八端出ゆるべきなり。次の句ハ深川と撫すて
流石繁花の地も。名月夜狂人の騒きと云たら

○放といふ事

るゝなり。さてさ此中に云ひ誹せる句中の放ハ
切の類ハ類しく。誹文俳句を作るの手際なり。

これらハ物を喩ふに於て。其物に似よう
げる案かの事を寄せ合せて喩へをいふべし。
草をう門發の如し。強く人をしてゆるしくな
すふに其場を去に親う志むるに於て。似より
ざる事かく喩へへ。こゝにきめこゝみにふくべき
くんいふぞによく感發せし。案かなる事ありて喩
せざるく人ぞかと感發せし。これを發んにむ
かし画人のかく一容来ゆくく絵を乞ふ。たふ
交ハ墨絵の香るなり。画人於ほくらく必為なん。

これを何ふに驚なり。さて画人とせるに更に
御なし。一點も筆紙くござれだたゞに為と御
てよう夜なり。画士ここに一御を申うけ。紙をのべて
四隅より黒くねりくて。中に及んで続きわど
浴しされバ。驚へあきてなりに出来さりぬ。ぬく
墨をすぬ迹だ。墨と紙との色をあれて驚
りよく白し。されバそらへの放まても見に驚し
きなり。されバ出せる營の句の如き。營と首と
をいく夜と尻とを喩へハ。營夜首尾かねじ礼

ゆゑかの墨にて亀鳴の如く放の際にかくし。法愛の猫の如きハ乗にのりて。よく亀放といふべきなり。されバこそゆかり放にもあらぎ。更にぬめりなきも
ぬめりハ縁語の字のごとく杜若といひたん序にすゝつ三河と重く乾きたる詠すりく彼勝といふ類なり
却てふとおもし。道理の吹えぬるとなるなり。又ゆらく格よぬめりよとひ孫り思ざバ理屈句となるらん此理屈とぬめりとの間に於てハいつ迷ふよしといふん所にとハ偕おもしろき句あらし無ゆりとおもふべし。

さみだれや龍燈あげる番太郎
年くや猿にきせたる猿の面
元朝やおもへバ淋し秋の暮
白けしや時雨の花の咲つらむ
月まきし帰光ハ子孫が家なれ
初句ハ新なるにあげたる番太がともし火也。龍宮世界の物と見たなし。出るれ地に降るて眠のうぎり淋しきるを喩しくり。猿の句さ元朝猿の句なり。季節の元朝にあてたる

しかあれど。年〳〵の累字改まれる句くるまり
明なり。風ハ我身なく。結ハ是なりの人情く。
句のあらハ身の毛よるふぞ恥ゆべし。八諂貪(へつらひむさぼり)のこゝろ
多きを歎しくるなり。身三ある元祖の句々。
いま發業にむかひ。よろづりの雑ひくる去来
さを喩さんとて。木蔭の林を吟むしくるく。
折りへだの雑。折りくだくとて風雲をあるも。
芥子句ハ句の字句眼なり。句れあるハ咲かり
とて行の甲斐やハ知る。げ不若ぐれの雨を標し

せし花の色なれだにとなり。終りハ翁が拾遺ん
の句く。月の行きハ拾遺の吟也し師匠ハ子路
の吟也しまく。句の出ろハ月寒く凛(りんく)くくる
あのうき麻をかの合華れ縦(しきね)りく喩しくり。
されだ大月句れ能様。蒙回の人情。表兆乃
蕉林。芥子の附句。老の拾遺の子路。いづ迄を
諸人のおもひみるし。これを放とのふ。さま迄ぞ
新くかけ放れてぬかりなきも。句意の明なる
を体格の悦なるが本ぐし。

思案するに冥途もかくや秋の暮
又盃の水を掬すや又似む
いざよひの月ともやせ淋しさく
初句ハ芭蕉翁元祖の句にくらべて致すなり。
其流の句ハ巧なる稀なる花を似ありと覚へ
容すれど友に稀なるなりけり喩せり。これ白
芥子れ句をいくつべくて一等新しき方あるん。
游菊の句。残多く数にをしぶされど致すなり。
残に落ん。頭るをうしざるハこれなといふれ学なり。

此之体より籾鋤くゆくりの連歌の姿とあるも
あらん。今我様の句れ固くにさみだれのゆかし
さゆげられを示し

日の道や葵うつむく五月雨
さみだれや桶の箍こるる秋の声
さみだれは鶴の脚みじかく成にけり
さみだれや蚕煩ふ桑乃畠
さみだれや巻柏の縁いつまでも
さみだれも渡の五月の小紋かな

さみだれ平川物差や月の影
ふる音や耳もすうなる梅の雨
さみだれハ滝ふり埋むみかさかな
十六秋ハ杢川ぅ小寓凡ちしめかれ
この十一句のうち其人の作とも覚えぞ。甲乙

○連句俳句差別の事

あるハ古世中の安後なるべし。就中銘ある
二句ハ俳諧ともいはず。其さ連歌にあらず。あやな
きのまゝ。かゝる体ハ集中只此二句にとゞめし。されど

此二句ちといひふあらざる事も知り難く。連歌
ふゆらざる事も知り難し。されば辞姿ふ於て
定れる体あり。されバこれを知りて其句を作らす
條さく惑ひ多その庵に述だ。今要しく判法を
べきなれどこれ容易の事ならぬ故に只一渡見
いおぶ。俳諧の句ハさみだれの降るさまハ更にすも
いおび。只就椅ゆぐるとみのべくさみだれ乃
むらりの降を喩し。蓼のかゝむく小日の御紋
知るといふ。一天のかさ雲あるを示し。桶

の觸されるといふ斗なく。深浅ありて物の打る
を思はせ。鶴の脚みじかくみゆるなく。沼あの
堀りふるを喩也。仕方なり。ある俗にいふこじ
つけなり。連歌の句は。洗ふかさなどゝ云一通り
まくいひ下しなり。俳まくはうさ足づるといふを。
ふかさなつかなどく雅言(みやびごと)のなくこじつけなく。一
筋にいふは連歌なり。まさに分ぬべきは連歌乃句
餘く雅なのなく仕立ぬるも。又格なくいひなしぶ
俳句となり。俳句よく俗語のなく仕立ぬるも。一筋

のいひ下しなれば連歌なりと知べし。能るを分紀
世は歌連歌のみやび云をうらやミ手尓壺を波を
乳し。或ハ理報破りて理報にまけなど。言ふ不

○隠士之句を解く事

ありもゆくとぞ。人は一男来て加る。月は一
隠士に遇ひて。その後をいかに及ぶ。是れ哀の
格報に苦るに隠士應せば。隠士が句を信く
だすなりも之句を聞き。是れ方今(いま)れ調なりといふ
されたる言に應せば。依て蕉翁が句をかゝげて

名義の格に説くに。隠士がいまだ初めて格にと
見れども是格なり。然もおもてに老の眼にては。
物ごとに格と見えざるがごとし。これ物々に然ものごとく
必ずしも事にあり。且つ格を排ひ。蕉翁が句に至
ても其に滞りとして只闇裁に向ふがごとし。所謂
蕉翁が集を披て読みしてしまず。隠士ゟ窺く所
全く道理なきにはあらねども。句意味なく或いは
説き二たる。もの十が八九なり。假令に於ては
化日閑し。蕉翁が句の解書たるとも隠士が

説に拘泥されど。俳諧は如何なる所謂のもの二三句
に会せざるも是ぞ事の欲は所なるらん。又隠士に
能くなし下形しかども其の宿癖を被りて二句の意を
通ぜしめんと。隠士がいまだ格緩に至るまれども必
理にかなう。かの二句のごときは理に離れてるもの也。
況もて理にふさがれたり。二句の旨を叶んとあらば
理を説き纏しというとも。これ於いてくらく理に落る
の戒も必ずある事なり。すなわち理緩捨て句意
を尽くるに拘滞なり。假令に於ての理は物の脚く

格は変の体にして常に離るる座ぐるみのなかにも
假令(けりやう)離るるとも必ずその分なるべし。或曰詩歌連乃
三十に至りて妻に上乗の旨をさとる。三十より前の
句をば後吟し後に誉をなさしむかへり。此事に
あれを少しくおもくらく世に加工の説といふ事
なり。加工とは古人の説なる上に又説き加ふるを
いふ。先達既に加工し文解(と)きのぼせたるを其
末に生(うま)れ出し人今は解釈せんと説なくさせ
とく悟(さと)らしむらんも昔しられば変に一奇説

をはく。その吐く変必ず我の為なるしが多くは名利
になりぬ。これを虚假(こけ)の加工といふなり。初心或は
道郷のこまかなり。其先偽りがち雑なれば大かた
は説者の生性なるにその身持くにもなり三代
説こそいとあるる幽玄の極(きは)ミ理なれ理なしが
とたのみ入より心あるぶりて縁になやなど境
に入りの多し。かかる奇説の濫觴をなす

○發句の魂といふ事

其角がかける猿蓑集の序文より起出るなる

同じく序にいはく

誹諧の集作る事古今にわたりて此道乃おりおり起るべき時なれや。幻術（げんじゆつ）の第一として其句に魂の入ざるハ夢に夢見るに似たるべしとぞ。彼西上人骨もて人を作りて云々。誹諧に魂の入らんことにこそとて我翁行脚の比伊賀越しける山中にて。猿に小蓑をきせて誹諧に魂を入給ひければ。たちまち断腸のおもひを叫びけん。あだに懼る

べき幻術なり

初しぐれ猿も小蓑をほしげなり

おりふし此序文ハ猿蓑集にのせると記其角が一時の狂言なるを。今ほなきゝ業ハ此道を伝するのあまりにおもひとゆる事とおもひまさ

古池や蛙飛こむ水乃音

此句にハ蕉翁の趣をとげける書なりとゆるになづむなりしん。伊賀越の句ハ只時雨の発句なり。句意ハ猿のさむげなるうづくまりたるを詠じて山路の時

哀れ悲しきを喩しける句なり。又世或人の
説に古歌にハとくゝ云魂ゆりといふ。此説おし
なめくハ清られ侍ども其字を案ずるに。伊勢
物語に紀の有常むすめしかりしと。在業平丸
於ほよ里夜後をおくり給ひしに。有常

あれや此天の羽衣むへしこそ

君てのみけしとまりなき迄

此歌のこゝろ語ハ。これ天の羽衣なり。此諸ある
御ころなれだにしも。かゝる御衣料とも人のなり

されとよみゝく。さて其羽衣を此方へ贈たる事
ゆゑに示しといふべきを言におふゆりさせたる歌
なり。此云におふゆりさせる物を云魂と名づける
べし。翁が句まゝくいたるべし。

初雪や幸ひ庵にまかり在

此句翁久しく其草庵の冬を遇ふとて。偶書
あり。句の表ハ一筋にのひくゞしけるのごとし
こゝろハ偶書にあり。幸ひ庵にまかり在」人来れ
よ共に雪見せんといふべきを句におふゆりせける

なしんぞれ歌の云魂に就ていふの事なり。爰に甚し廣めていはゞ。歌発句に限る事にもあらず。凡て紀夕の結語にも必云魂あるべきなり。今此時節の句に強て魂をいはゞ。山路乃時節はいかなるものと問る人に答て。猿も小蓑をほしげなりといふをぞ。さこそと人さとく佛しき物と合点して合点する心が卵(すく)に句の魂なり。されバ此魂なる物を製せんとて。字義の格より切迚生し。切迚の其れ遠に変

より魂は生ずる事にハ有てるもの也。猶其れ此猿の小蓑いとゞをかしく。且寂(さび)ありハ此のごときを感情ある句なれバ。其角も傚(う)て幻術と賞し。此庵の荘叢とハ有てるもの也けれん。古池の句も亦桃青池ハりとより蛙のの夜深。人も好ミて縁物ともて。翁も古の字を添て例の寂(さび)をつけたり。此池芭蕉庵の物にハあらで。綾波り多き打捨ものなれバ。蘆芦(よしあし)生ひ交さがりて。それとも見えてざる不埴とぶ其音めぐ。さてハ池よと新しき迚

しとなり。蛙の句に何しろ。古池の句となり。書
の字ハ何となく出来たる所に風情ありけるが。
俳名を解の詫。此句を借り用ゆるにハ及べからざれ
ど。又もたゞ一旦の志めすまでに。此句中に俳名の
肯にハかゝはらず。翁も禅味ハ耳んじるべからざれど。
いまだ其名をゆるさずといふ名をとられ。

猿に孫く学ハ枯野をうけめぐる

と吟じ給ふ俳壬をかりて果なりとぞ。追ひて
初心の業。此句の格に依て考ふべし。ハ学ぶ道し。

俳道ハ生を殺して生を護るの道なりといへども
学ぶべくしてまなびがたし。学びがたきを学ぶ空拙

○学ハ法に依るべき事

なるが故なり。凡そ物学びハ法に依りて学ぶべ
きなり。むかしの臣潮といふ所の海に鰐
といふ大魚ありて人をなやます。韓文公といふ
法老其数あまるを知りて文を作りかの海に志
づめられたり。鰐その法に感じて逃げさりたり。後
百年にして鰐又出て漁人をなやまし。其時の

都て漁人に命じ網を作らしめてかの鰩
をとれる時の人洪二郡主の切を論じていはく。
文を作て鰩を逐てのちはじめて其人の徳の致す
所なり。徳は虚象にして学び難ければ後の
世に伝へ難し。網を作るは法の依るべきがゆゑに
人に伝ふるに易し。洪法とも定むれといひし
とぞ。今俳諧の体格は是すなはち法なり。洪法に
依て学ぶべきなり。その道意は幸ひに翁が
先句の格とすべきあり。さて格の類はあまた
其に無じぬるがごとし。体格の称はしかり。季節
の定めがたき。体裁の依るべきをさだめし。編目
条に別ち。各二三十句をあげて是非を附せ。体
生に迷ふるもの。洪格をもて押て知べし。その四
条は一に範囲二に境界三に端出四に名所の句
なり。